

日本とモンゴルの交流

～私とモンゴルの出会いを通じて～



外務省アジア大洋州局中国課
課長補佐 藁谷 栄
E-mail : sakae.waratani@mofa.go.jp

歴史への興味がライフワークに

みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました外務省アジア大洋州局中国課の藁谷です。本日は日本とモンゴルとの様々な交流についてわたし自身とモンゴルの出会いを通してお話しさせていただきたいと思います。

わたしは1976年に東京外国語大学モンゴル語学科に入学して以来、モンゴルと関わるようになり今年で26年になります。もともとモンゴルが大好きというより、大学の入学を前に遊牧民の歴史に興味を持っていて、史学を専攻しようか語学をやるのもいいなという軽い気持ちでモンゴル語を勉強し始めたのがきっかけです。在

学中に同級生にモンゴル語の家庭教師をしたり、モンゴル語辞書の校正や通訳のアルバイトをしたりと、モンゴル語を使ってお金をもらう運があったようです。途中で何度も別の分野に移ろうと思いましたが、結局はモンゴルから離れられず現在に至る結果となりました。こうしたエピソードを交えながら話を進めていきたいと思っています。

わたしは子供の頃から歴史の本を読むのが好きで、とくに遊牧民について感心がありました。高校の歴史教科書にはあまり詳しく記されていませんが、本屋さんで並んでいる新書本などを探しているうちに、いくつか遊牧民の歴史について書かれたものを見つけました。護雅夫先生の著作「遊牧騎馬民族国家」の中には遊牧騎馬



民族に関する習慣と日本の御子さんの共通性について書かれた部分があったり、江上波夫先生が書かれた「騎馬民族国家」にある騎馬民族と日本人の起源というあたりを読んでいるうちに騎馬民族っておもしろそうだなと思い、大学では遊牧民のことを勉強しようと思いました。また、語学から入るのも一つの方法と、東京外国語大学のモンゴル語学科を受験し、縁あって入学できたため、モンゴル語の勉強をすることになったわけです。

護雅夫著 遊牧騎馬民族国家 講談社現代新書 - 1967
江上波夫著 騎馬民族国家 中公新書 - 1967

当時「モンゴル語を勉強しよう」と入学してきた学生の興味の傾向というのは東洋史学的なもの、日本語とモンゴル語との比較など言語学的なもの、そして異なった民族・習慣・文化に興味を持ち、文化人類学的なものといったモンゴルの歴史・文化に興味を持っていたという点があげられます。

そしてもう一つは、現代モンゴルの政治・経済への興味です。モンゴルはソ連に次ぐ世界で2番目の社会主義国で、1917年のロシア革命ののち、1921年に独立し、1924年に国名を「モンゴル人民共和国」と定め、その後、ソ連の影響のもと、社会主義の道を歩んでいくことになりました。この時期を著した書籍として、田中克彦先生が書かれた「草原の革命家たち」、磯野富士子さんの「モンゴル革命」などがあります。このように1900年代初頭の中国・清朝時代の統治下からモンゴル国家がどのように誕生したか、またどのように独立を勝ち得たかという問題に興味をもった方々の文献がありますが、わたしが大学へ入学した当時の周りの人は、歴史・文化だけでなく、現代のモンゴル社会に興味を持った人たちもいました。

共通して言えることは私を含め、モンゴルに対し親近感を持って取り組んでいたということだと思います。

田中克彦著 草原の革命家たち、モンゴル独立への道 中央公論社 - 1973
磯野富士子著 モンゴル革命 中央公論社 - 1974

バイトで磨き上げたモンゴル語

わたしが大学に入学する少し前の1972年2月24日に日本とモンゴルの外交関係が樹立しました。ちょうど2002年が外交関係樹立30周年となります。

外交関係が樹立されて以降、日本とモンゴルとの間で様々な交流が始まったのですが、1974年からは文化交流の一環として教員・学生の交換留学が始まりました。それまで日本の大学のモンゴル語学科には内モンゴル出身の先生がいたのですが、1975年にはじめてウランバートルからモンゴル語の先生が来て、長期的に教鞭をとられるようになりました。1976年に入学したわたしは、はじめて「ウランバートルのモンゴル語を学ぶ1年生」となりました。

こんな風にわたしの学生生活は始まったのですが、冒頭でもお話ししたように勉強を活かしたアルバイトもいろいろしました。その中でとくに思い出となっているのがカシミア工場建設関係の通訳のアルバイトです。モンゴルにあるカシミア工場の労働者が日本で技術研修することになり、その通訳をしました。1939年にモンゴル東端のハルハ河で起こった戦争、いわゆるノモンハン事件についての処理が両国間の懸案事項としてあったわけですが、外交関係樹立後の1977年にこの問題の処理として日本がモンゴルに経済協力するということになりました。経済協力の案件として様々な案がありましたが、山羊の毛、つまりカシミアを加工する工場をモンゴルに建設するということになりました。建家はモンゴル側が作り、製造のライン一式を日本が無償援助しました。

1981年の稼働に向けオペレーションとメンテナンスの技術習得のために多くのモンゴル労働

者が技術研修のため日本に来ました。私は、1974年の延べ3ヶ月間、モンゴルの労働者と一緒に生活をしながら、その通訳をしました。

技術研修中、モンゴルの人にとってあまりなじみのない機械や技術、それに工具や部品に出くわすこともあり、モンゴル人と一緒にどのような用語を使ったらよいか考えました。このように、当時のモンゴル国内で使われていた紡績技術とは異なる点が多数あり、また、ラインを自分たちで動かすためには、非常に細かな点まで理解してもらう必要があったため、わたしのモンゴル語を磨く大きなチャンスとなりました。

技術的な言葉だけではなく、生活する中で、普段大学では習うことのない様々なモンゴル語と接することができ、大変有意義な経験が出来ました。また勉強だけではなくバイト代も月40万円と当時の学卒初任給の倍以上稼ぐことができ、こんなことをしている内に結局、学部で7年間も在籍することになってしまいました。

カシミヤの話に戻りますが、モンゴルはこの援助により原料のみを輸出していたのを、自国で原料から柔らかい毛のみを抽出し、セーターなどの付加価値の高い製品にすることができるようになりました。日本の援助によって作られたカシミヤとらくだ毛の加工工場「ゴビ」工場はハードカレンシー（交換可能通貨）を獲得できるトップクラスの工場として、経済効果の高



留学生寮のなかで。
一緒に写っているモンゴル人とは20年近くの付き合い

い工場に発展させることができました。もしモンゴルに行くことがあればカシミヤのセーターを是非見てきてください。

ノモンハン事件

1939年夏、満州国（中国東北部）とモンゴル人民共和国との国境で、日本と旧ソ連・モンゴル連合軍とが衝突した大規模な国境紛争。7月下旬の日本軍と旧ソ連・モンゴル連合軍との衝突では、日本軍は2万人の死傷者を出し、壊滅的な打撃を受けた。

念願のモンゴル留学へ

長い学部生活が終わり、大学院に入学した1983年の11月から2年間モンゴルへ留学しました。当時は日本からモンゴルへの直行便が無く、北京まで飛行機に乗り、北京からウランバートルまでは列車で2泊3日をかけ移動しました。私の到着した11月6日は旧ソ連の革命記念日前日で、周りのみんなはお酒を飲んで楽しんでいたのですが、私はあまりの寒さに風邪をひき、すぐ寝込んでしまうことになりました。モンゴルの冬は当然のように寒くまた日が短いと寮の裸電球の照明が弱いので何となく暗い気分で、留学生活を始めました。わたしは、モンゴル政府より奨学金として475トゥグルクをもらっていました。475トゥグルク（3トゥグルク1ドル、200円）は日本円で約3万円ですが、当時の物価では1ヶ月の生活費としては十分な額でした。モンゴルのエンジニアクラスの月収が700～800トゥグルク、一般の労働者は500～600トゥグルク程度となっています。また普通の学生が100トゥグルク、優秀な学生で200トゥグルクの奨学金をもらっていたので、モンゴル人の学生と比較すれば余裕のある生活といえると思います。

留学中の2年間は休みになっても日本へ帰りませんでした。夏休みには大学がアレンジする外国人留学生向けの地方旅行に参加し、モンゴル人の先生と一緒に10人程でキャンプをしながら



らバスの旅をしました。カラコルムをめざし遺跡巡りをしながら全行程約1,200kmを2週間ほどかけ移動しました。

モンゴルの習慣なのですが、旅行している人がいれば、牛乳入りのお茶やミルク、ヨーグルトを持ってきてくれます。これは、モンゴル人にとって牛乳入りのお茶や夕食後のヨーグルトは欠かせないものですが、移動をしているときはこのようなものを持ち歩けず不自由しているだろうと気遣ったことです。ミルクなどを運んでくれた子供に、キャンディーなどをお返しすることも習慣でした。

現在、街角で40リットルくらい入る缶を置き、牛乳を売っている人を見かけますが、牛乳売りが、牛乳が売り切れちょうど缶が空になってしまうと、売った客の牛乳缶から一杯だけその缶に返すという風景が見受けられます。これは乳がすべてなくなるといのは雌牛の乳が涸れるということにつながり縁起が悪いという考えがあるからです。

ロシア革命記念日（10月革命）

グレゴリオ暦1917年11月7日、レーニンらが主導するボリシェヴィキがペトログラードで武装蜂起し、これがロシア全土に広がり2月革命の時に誕生したケレンスキー臨時政府が倒れてソビエト政権を樹立し世界最初の社会主義革命が宣言された。ロシア10月革命といわれるのは、この日がロシア暦（＝ユリウス暦）1917年10月25日だからです。

「ペレストロイカ」と 激動期のモンゴルに

1985年モンゴル留学を終え、日本の大学院へ戻り、1987年に大学院を修了しました。同年、在モンゴル日本大使館専門調査員という職に就き、モンゴルに再び出発することになりました。

この頃は旧ソ連の共産党書記長ゴルバチョフによるペレストロイカが押し進められていた時期です。大使館では専門調査員として様々な業務がありましたが、現地の新聞を読むということが主な仕事でした。毎日の仕事として、人民革命党の機関誌「ウネン」、日本語で「真実」という意味ですが、その新聞を読んで出来事をまとめることをしていました。当初は型どおりの共産党のプロパガンダ新聞でしたが、ロシアのペレストロイカの流れがモンゴルにも浸透し始め、人民革命党（旧社会党）の公式見解とは異なる自由な発言が投稿されるようになったり、テレビでは討論番組の中で反体制的な意見が取り上げられるようになったりして、民主化への流れが徐々に始まり出しました。

しかし、東欧へ留学した学生の中には当時の人民革命党のやり方では改革が進まないのではないかという意見も出るようになってきました。このような考えの青年を中心に民主同盟と呼ばれる団体が活動を始めようになったのです。

1989年12月10日、世界人権デーにちなみモンゴルで初めて、人民革命党の主催ではなく、民

主同盟による集会が行われました。さらに翌年になると、民主同盟による政治集会が盛んに開かれるようになり、3月のはじめに人民革命党の政治局全員の辞職を求めハンガーストライキが行われました。このハンストは3月8日の国際婦人デーまで続きましたが、この抗議行動で人民革命党幹部の政治局員全員があっさりと辞職してしまいました。

東欧の民主革命のように流血もなく、今から思えば、モンゴル人の政治的センスというか社会が持っている英断によりあれよあれよという間に変革が起こりました。モンゴルは人口が少なく、民主同盟の中心となっている若い活動家は、人民革命党の幹部からみれば「だれその子」というように親戚・知人関係がたどれ、体制側と反体制側の間人間関係が非常に近かったのだと、武力での対決もなかったのだと思います。



1990年2月17日に撮影した、モンゴル国立図書館前のスターリン像。写真をとった3日後の20日の夜から21日の未明にかけてスターリン像は撤収された。なお、現在この像は、あるパーに飾られているとのこと。

1990年、人民革命党政治局員の辞職の後、複数政党制を導入して初めての選挙が行われました。結果的には人民革命党の勝利に終わりましたが、民主連合側からも数名が政府側に加わりビャムバスレン首相の下、連合政権がスタートしました。1992年にはマルクス・レーニン主義を放棄した新憲法が施行され、国号を「モンゴル国」としました。新憲法後の選挙でも人民革命党が圧勝し、ジャスライ首相が就任しました。

一国の体制が根底から変わるというこのような大きな変革の場面を、専門調査員として目前で見聞きすることができたのは貴重な体験であったと思っています。

ペレストロイカ

旧ソ連の末期に、ゴルバチョフがすすめた改革。「立て直し」の意味。旧ソ連では、共産党の一党支配と中央から指令をだして動かす経済の体制が、非効率や技術のおくれを生んでいた。1985年に共産党書記長に就任したゴルバチョフは、翌年ペレストロイカをうちだした。(1)情報の公開 (2)議会の民主化 (3)市場原理のとりいれ (4)アメリカ合衆国との協調・軍縮などで、東ヨーロッパの民主化に勇気をあたえ、冷戦の終結をも実現した。しかし国内では経済が混乱し、民族紛争に火をつけて、1991年にはソ連の解体をもたらしした。

世界人権デー (Human Rights day)

1950年の国連総会で制定。国際デーの1つで1948年、パリで行なわれた第3回国連総会で「世界人権宣言」が採択され、「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。」ではじまる全30条と前文からなっている。

国際婦人デー (3月8日)

1910年の国際社会主義婦人会議で、「婦人の開放と世界平和を目指す国際的な婦人行動の日」を設けようと提案された。アメリカ・ニューヨークの婦人労働者たちが、女性も政治に参加できる権利を求めて集会を開いたことにちなんで、この日に決めた。

市場経済化を直視した （株）大阪カシミア時代

3年間のモンゴルでの専門調査員を経て、1990年4月に（株）大阪カシミアに就職しました。折しもモンゴルが西側との貿易により市場経済化をはかろうという時期、ウランバートルに駐在し、カシミアの原毛を日本に輸入する仕事をすることになりました。

ウランバートルに事務所を開設すると本業以外にも「工場を作るための合弁先はないか」、「絨毯を日本で売りたい」等々モンゴル側から色々な引き合いがありました。総合商社の現地仲介役も行ったたりしてモンゴル側の企業とコンタクトをとる機会が増え、人脈が広がった時でした。

急速に市場経済化が進む一方で経済事情は非常に混乱しており、モンゴルが移行期の困難な時期を乗り越える支援をしようという流れが、ODA事業の様々なプロジェクトとして始まりました。

その当時のモンゴルでは、貿易をする商品毎に売値・買値が国家価格委員会で決められていました。同じ商品であっても、市況により価格が下落することもあることや、顧客をのがさないためにやむを得ず安く価格を設定するというような常識は一切ありませんでした。このような習慣により交渉が決裂することもありました。

カシミア原毛の取引以外にトイレットペーパー工場の建設プロジェクトやカシミア加工ラインの据付をはじめ、フェルト工場に布団カバーの刺繍機械を販売したりしました。

西側から輸入した染料と日本のデザインによるモンゴル羊毛の丈夫で良質な絨毯の輸入もしました。

やがて国営企業の民営化が進み、価格統制もなくなり、西側の要求も受け入れられるようになってきましたが、モンゴル人は長期的な仕事に対する展望、つまり利益率が悪くても商売として我慢強くつき合おうという気持ちはすくなく、少しでも高い売り先があれば、古くからの顧客を差し置いてもそちらへ商品をまわしてしまうということがありました。

ODA (official development aid)

先進国の政府機関による開発途上国や国際機関への援助。(1)政府によって供与されること (2)途上国の経済開発や福祉向上に寄与する目的であること (3)供与条件が緩やか(贈与相当分が25%以上)であることの3要件を満たすもの。2国間援助と多国間援助の2つの形があり、前者は返済義務のない贈与(技術協力と無償資金協力)と、返済義務がある政府貸し付け(円借款)で、後者は国際機関への出資・拠出などを指す。

1991年中頃、大阪本社へ転勤となり、1994年まで勤務後、同社を退職し外務省在モンゴル大使館へ勤務することになりました。



留学生寮の前で。この寮は、現在もモンゴル国立大学の寮として使われています。

日本人初のモンゴルでの結婚

話が前後しますが、在モンゴル日本大使館専門調査員時代の1988年7月27日、インド亡命のチベット人でモンゴルに留学していた女性とモンゴルで結婚しました。モンゴルで結婚式を挙げた日本人はわたしが初めてだったようですが、婚姻届の出し方が日本とは少し異なっていました。日本では婚姻届はこれから夫婦としての生活を始めますという時に届け出るのが普通ですが、モンゴルでは結婚宮殿という結婚登録所があり、そこでは事実として結婚生活が始まっていたことを国が追認することが通例となっています。わたしの場合も結婚証明書には、「xx月xx日に結婚したことを7月27日に結婚宮殿はこれを認める」と記したものが発行されました。

こうして結婚したのですが、実はその頃は、外務省員の配偶者は外国人であってはならないという規則があり、正規の職員として外務省に入るには妻を日本に帰化させる必要がありました。帰化するための条件としては、結婚して3年以上、日本に住んで1年以上という条件に達して初めて手続きが出来るというものでした。わたしの場合は1992年に法務局へ必要書類を提出後、面接があり、書類の記載方法についても事細かな指摘があり、中にはその煩わしさから

途中で断念する人がいるほどですが、1993年の終わりになってようやく妻の日本への帰化が認められました。

大使館員としてふたたびモンゴルへ

1994年6月、外務省に採用され、在モンゴル大使館に勤務することになりました。その頃のモンゴルは1990年当初と比べ市場経済化がやや停滞している時代でした。市場経済化が進めば豊かになると思っていたのが、暮らしがいつこうによくならず話が違くと政府を批判する声があがっていました。1996年の総選挙では1992年に大敗した民主連合が1992年の6議席から50議席へと大躍進し与党となりました。政治家の若返りが急激に進み、大臣クラスが30~40代、次官、局長にも若手が登用され、役所の中も様変わりしました。新政権は経済自由化を推し進め、価格統制が排除され、エネルギーについても自由化を図り、リベラルな経済施策をうち立てました。

当初、新政権は意欲的な改革をしていると評判が良かったものの、民主連合内部での政権争いが後を絶たず、内閣総辞職により、首相が3人も交代することになりました。人民革命党の経済政策に不満を感じ、若い民主連合への期待が1996年に政権交代となりましたが、未熟さが露呈し政治不安を与えることになり、2000年の



99年ごろからはやりだした地ビールの店で、留学時代の友人と再会。

選挙では人民革命党が76議席中72議席獲得し政権は再び逆転しました。

1996年以降は日本、モンゴル双方の要人が往来し、モンゴルの首相や大統領の訪日、1999年に小淵総理がモンゴルを訪問しました。

その準備をしたり両国間の文化交流を行ったり、色々な政治・経済の動きを整理したりとやりがいを感じられる時代に大使館で勤務ができました。モンゴルと日本の関係も良好で、恵まれた時期に大使館員として仕事が出来たことをうれしく思います。

工業化への課題、経済状況

モンゴルの経済動向について少し振り返ってみたいと思います。モンゴルは、1950年代以降、牧畜業から工業化へとの方針のもとコメコンの援助をうけながら工場建設を進め、紡績工場、銅選鉱の工場などがモンゴル国内に出来ました。1980年代終わりまで続くこの時期、ソ連、東欧諸国の指導により経済活動を行ってきましたが、ソ連の崩壊、東欧諸国の自由化によりその体制が崩れた1990年代以降は、社会主義時代に出来た工場が新しい市場経済化にどこまで対応できるかということが課題となりました。

まず対コメコンへ依存していた輸出相手国を、ハードカレンシー獲得のため西側へとシフトしていく必要が生じましたが、相手国市場が十分に開拓できず、伸び悩んでおります。一方でモンゴル国内での消費需要は少なく、輸出先がない中でどう国内産業の振興をするかということになります。日本へは金を輸出していましたが、90%程度の粗金を日本国内で精錬の委託加工を行うというもので、貿易額こそ多くなりますが、国内工業化の点でいうと寄与は少ないといえるでしょう。中国へのカシミア原毛の輸出が増えていますが、これは、中国産のカシミア製品、半製品の世界シェアを増大させるため、モンゴルにとって好ましい状況となっていません。

マンホール・チルドレンと呼ばれる家庭の事情などで暖房配管のあるマンホールで暮らす子どもたちの数は1,000人とも3,000人ともいわれています。これも国内経済の停滞から失業率が改善されず、貧困層が増えたことの表れといえます。背景として、1990年以降は国営企業のリストラによる失業者が他の分野で十分吸収できず、主に牧畜業に流れましたが、単に貧農を増加させることになりました。国内産業の育成が上手く進まない、失業率が下がらない状況で貧困層が増加するとともに家庭の崩壊が引き金となって家出する子どもが増えたわけです。なかでも地方の貧困層の家庭からウランバートルに出てくる子供も少なくありません。マンホール・チルドレン問題というのは都市だけの問題ではなく、地方での貧富の差が遠因しているわけで、経済的な側面でいうとモンゴルは深刻な問題を抱えているといえるでしょう。

コメコン

1948年OEEC（欧州経済協力機構）が活動し始めたことによる米ソ冷戦下の経済封鎖に対抗して、自給自足体制を確立する目的で1949年1月に結成されたソ連、東欧諸国の経済協力機構である。その国際分業構造の中で、主に産業機械、自動車など工業製品の生産に従事し科学技術政策を促進し、コメコン諸国内において先端技術分野で高い商品競争力を誇った。コメコン域内貿易は、まずソ連から原料・燃料を安価に輸入、東ドイツで加工し、生産した工業製品をソ連、東欧諸国に輸出するという主流であった。

OEEC（Organization for European Economic Cooperation）

欧州経済協力機構。欧州復興計画についてヨーロッパ諸国間の協力を確保する機関。1948年創設。OECDの前身。

OECD（Organization for Economic Cooperation and Development）

経済協力開発機構。OEECの後をうけ、1961年に発足した先進工業国の経済協力機構。経済成長・発展途上国援助・通商拡大の三つを主要目的とする。加盟国24カ国。日本は1964年加盟。

最後に

本日、お話ししたことは、個人的な経験が多く、皆様のモンゴルへの理解に役立つか心配ですが、皆様がモンゴルを理解しようとする際のきっかけになれば幸いです。

今までの経験では計れないことに出くわしたり、自分の常識とは違う常識を持つ人に会うことは、びっくりしたり、時にはいらだつこともあるのですが、これが外国の人や文化に触れる際の醍醐味かもしれません。

自分の世界を広げる練習と思ってモンゴルとの交流に積極的にチャレンジしてみてください。

本日は長時間にわたり、20数年のわたしとモンゴルとの関わりについてお聞きいただきありがとうございました。

以上

(文責：井上育也)

わらたに さかえ 藁谷 栄プロフィール

生年月日：1956年5月10日生（45歳）

学歴：

1983年3月 東京外国語大学モンゴル語学科卒
同年4月 東京外国語大学大学院アジア第1言語
モンゴル語専攻入学

1987年3月 同大学院卒

職歴：

1987年4月 在モンゴル日本大使館専門調査員
(嘱託)

1990年3月 同嘱託終了

同年4月 ㈱大阪カシミア入社、
同ウランバートル駐在員事務所配属

1994年2月 同社退職

同年6月 外務省入省、在モンゴル大使館勤務

1999年9月 外務省アジア局中国課勤務

趣味：水泳、テニス、色々なジャンルの音楽
を聴くこと、絵画鑑賞

家族構成：妻、子供一人

モンゴル年表

- 1911 中国で辛亥革命が起こる。中国（清朝）より分離、自治政府を樹立
- 1917 ロシア革命
- 1919 中国が外モンゴルの自治撤廃を宣言
- 1921 中国より独立を達成
- 1924 モンゴル人民政府が国号を「モンゴル人民共和国」と定め、憲法を採択
- 1939 ノモンハン事件（ハルハ河戦争）
- 1972 日本・モンゴル外交関係樹立
- 1989 モンゴル民主同盟によるデモ始まる
- 1990 民主勢力がハンガーストライキ実施。人民革命党、一党独裁放棄と政治局全員辞職の声明を出して、スト解除。複数政党制を導入して初めての選挙。人民革命党圧勝。ビャムバスレン首相就任。オチルバト、大統領に選出される
- 1992 国号を「モンゴル国」と定めた新憲法を施行
- 1993 オチルバト、大統領に当選
- 1996 総選挙で民主勢力、連合によって圧勝。エンフサイハン首相就任
- 1997 バガバンディ、大統領に当選
- 2000 総選挙で人民革命党圧勝、エンフバヤル首相就任